

20 松野貞一郎氏葬儀

〔法学新報〕第二三三号 明治二十六年二月二十日

○松野氏

嗟呼社友松野貞一郎君濟世の材を齎らして物故せらる江湖知ると知らざると其不幸を痛まざるはなし而して我輩の悲哀遣る方なきは素より云ふまでもなし本誌開卷、諸氏の吊詞を掲げ以て聊か天下君を傷むの人と共に血涙を分たんと欲す君の葬儀ハ実に本月十二日を以て執行せられたり今其次第を叙せんに当日午後一時富士見町の本邸より出棺し順路九段坂を下り神保町通りを右折し商業学校前を左曲し東京法学院前を過ぎり小川町通りに出て万世橋より御成道広小路を経て谷中天王寺に到る先導長驅し幾張の提灯、数百対の供花相隨ふ僧侶數十人、喪主遺子松太郎氏歳僅に十二、親戚牧、横田の両氏に擁せられて徒歩す嗚呼是れ実に涙の種なり会葬者にハ判官、状師其他朝野の縉紳を始め親戚、故旧、門弟の人々無慮三千余人にして孰れも徒歩隨從し莊嚴謂はん方なし式場に於てハ法科大学教授の総代として穂積陳重氏東京法学院講師の総代として菊池武夫氏同院々友の総代として花井卓藏氏及び右両校生徒総代、松野同窓会総代等の吊詞朗読あり言々血、区々涙、潸然襟を沾さ、るものなし特に松野同窓会総代外崎猶之助氏の如き嗚咽絶叫能く語を續くる能はず会葬の人々皆な泣く時に落木蕭々満山幽にして被髮大荒

に降るの思あり嗚呼悲夫